

付章2 持統天皇と四條畷

前 言

中野遺跡では、古墳時代馬飼い集落の一部を検出した。これに関連し、本章では、四條畷市立歴史民俗資料館第32回特別展「鷺野讚良皇女 一持統天皇と北河内飛鳥・奈良時代一」に伴い、平成29年10月12日に歴史民俗資料館で行なった講演記録を掲載する。

1. はじめに

第41代天皇である持統天皇は、四條畷とかかわりの深い天皇でした。そのことは、数々の文献や発掘調査資料を紐解くことで、想定することができます。この講演では、それらの資料を概観しながら、天皇と四條畷の関係について考えたいと思います。

2. 持統天皇のあゆみ

持統天皇と四條畷の関係を考える前に、まず天皇自身のことについて知っておきたいと思います。持統天皇の人生や業績については、『日本書紀』と、それに続く歴史書である『続日本紀』から知ることができます（直木1960）。それらの記述によれば、持統天皇の生まれは大化元年（645）のことです。天皇は名を鷺野讚良皇女といいます。父は中大兄皇子、母は蘇我倉山田石川麻呂の娘、遠智娘でした。父はこの年、乙巳の変で蘇我蝦夷・入鹿父子を滅ぼし、その後大化の改新として政治改革を主導していました。母方の祖父である蘇我倉山田石川麻呂はその政権で右大臣に任じられ、政権の中核にいました。

大化五年（649）、石川麻呂は、讒言により中大兄皇子に謀反を疑われました。彼は本拠地で建設中だった氏寺の山田寺で自殺します。しかし『日本書紀』によれば、没収された私財には「皇太子（中大兄皇子）の物」とあり、冤罪でした。この事件以来、母遠智娘は気を病み、白雉三年（652）頃亡くなりました。

657年、鷺野讚良皇女13歳の時、父の同母弟である大海人皇子の妃となりました。二人の間には662年に草壁皇子が生まれました。この年、父中大兄皇子は齊明天皇の崩御により政治を執り始め、668年には天智天皇として即位しました。しかし父は671年に崩御し、夫大海人皇子は出家して吉野へ向かいました。妻である持統天皇もそれに従ったようです。

翌672年に起こった壬申の乱に勝利した大海人皇子は、673年に天武天皇として即位し、鷺野讚良皇女は皇后になりました。天武天皇即位後、皇后となった鷺野讚良皇女は天皇を支えます。天皇は、飛鳥淨御原令の制定、八色の姓の制定や、銅錢使用の詔（富本錢）などをはじめ、多くの新しい制度を打ち立てました。

天武九（680）年には、皇后が病気になったので、天皇は病気が治るようにと薬師寺建立を誓願しました。これが本薬師寺で、その甲斐あってか皇后は快復しました。

朱鳥元（686）年に天武天皇が、3年後に皇太子草壁皇子が亡くなると、鷺野讚良皇女は翌690年に即位しました（持統天皇）。天皇は天武天皇の政治を引き継ぎ、694年には初の都城制を敷いた藤原京（新益京）に遷都しました。

持統天皇は、697年に孫の輕皇子（文武天皇）に位を譲り、史上初の太上天皇（上皇）となりました。この後も天皇を支え、701年に曾孫の首皇子（後の聖武天皇）の誕生を見届けて、翌大宝二（702）年に亡くなりました。

大宝三（703）年、持統天皇は天皇として初めて火葬され、夫天武天皇の墓に合葬されました。これが天武・持統天皇陵（檜隈大内陵・野口王墓古墳）です。この陵墓は鎌倉時代に盗掘され、事の顛末が「阿不幾乃山陵記」に記録されました。そこには墳丘が八角形であると記述がありました。昭和36年に宮内庁が行なった調査で実際に隅部がみつかり、墳丘は八角形で五段に築造されたと想定されています（西光編2013）。表面には二上山の凝灰岩が敷かれており、築造当初は白く輝くような威容を誇りました。

3. 持統天皇と讚良

持統天皇と四條畷の関係をみていくうえで、まず考えておきたいのは讚良地域という土地についてです。これまでの発掘調査による成果や文献からみると、讚良地域では飛鳥時代の前の古墳時代に、馬飼いが盛んに行なわれていました。

この馬飼いに従事していた豪族について、『日本書紀』には、天武天皇12（683）年10月5日の条に、「娑羅羅馬飼造・菟野馬飼造に連の姓を賜る」という記述があります。

これらの氏族の出自については、以下の記述があります。

◆『日本書紀』 欽明天皇23（562）年7月1日条

新羅の使者が帰国せず日本に住みつき、河内国更荒郡鷺鶴野邑の新羅人の先祖になった。

◆『新撰姓氏録』 河内国諸蕃の項

佐良々連 出自は百濟の国人、久米都彦から

宇努造 百濟の国人（または百濟王の子）、弥那子富意弥の後裔

◆『新撰姓氏録』 河内国未定雜姓の項

宇努連 新羅の王子、金庭興の後裔

このように、娑羅羅（佐良々）氏・菟野（宇努）氏とともに、百濟や新羅からの渡来系の氏族であるとの記述があります。このことを裏付けるように、四條畷市域の古墳時代の遺跡からは、朝鮮半島とのかかわりを示す陶質土器や韓式系土器などが多くみつかります。これら渡来系の人びとは、馬飼いの技術をもたらして四條畷付近に住みつき、豪族化したのでしょうか。

持統天皇と四條畷の関係を考えるうえで、次に助けになるのはそのお名前です。先に述べた通り、天皇は名を鷺野讚良皇女といいます。このうち「讚良」は、四條畷市全域と寝屋川市・大東市の各一部を含む古代「讚良郡」の地名からとられたものです。また、「鷺野」も、先ほど紹介したように『日本書紀』によれば讚良郡の中にある地名として「鷺鶴野邑」が出てきます。この地名の比定地はこれまで不明でした。この地名と同様に「○○のサト」と呼ばれる讚良郡内の地名として、『日本靈異記』中巻には、「河内国更荒郡馬甘里」が出てきます。この「馬甘里」は、讚良郡内で行われた馬匹生産（馬飼い）に関連する名称とみられ、同じく馬匹生産の牧があったことによる郷名とみられる、『倭名類聚抄』高山寺本にある「讚良郡牧岡郷」に比定できると考えます。この牧岡郷は、四條畷市砂・岡山地域に比定できると考えられます。このことから、「鷺鶴野邑」はこれ以外の高宮郷、石井郷、甲可郷、山家郷のいずれかにあった可能性が考えられます。この鷺鶴野（鷺野）の地名は、河内湖が低湿地であった際に水鳥が多く生息していた付近の景観によるものとみられ（瀬川1975）、低湿地であった可能性のある甲可郷、山家郷を候補地として絞ることができます。その中で、甲可郷内にあたる四條畷市内の清滝にあった飛鳥時代後期創建の寺院である正法寺にのちにつけられた山号は「小野山」で、「小野」と「鷺野」は母音の変換で通じることから、同一とみなすことが可能であるといいます（瀬川1975）。これらのことから、「鷺野」はおおよそ現在の四條畷市南野・中野・清滝などの付近を中心とした甲可郷域を指すのではないかと考えられます。

このように地名を皇族の名に使う場合、その地で生まれ育ったか、領地をもっていたか、その地出身の豪族から乳母が出たためその豪族に養育されたといった理由が考えられると言います（直木1960）。先ほど述べたように讚良地域では馬飼いを行なった渡来系の豪族である佐良々氏や宇努氏の存在が記録されています。これらの豪族の名も、持統天皇の名と共に通しています。天皇は、これらの豪族に養育された、あるいは乳母がこれらの豪族の出身だったといったような理由で讚良地域にゆかりが深かったため、その地名を名に持ったのかもしれません。いずれにしても、持統天皇の名には四條畷市域のこととみられる地名が使われており、四條畷とゆかりの深い天皇だったと言えるでしょう。

『日本書紀』によれば、持統天皇八年（694）6月8日、更荒郡（讚良郡）から白いヤマドリが献上されました。その年の12月6日には藤原京へ遷都されており、このことは遷都に向けた吉兆として捉えられ、郡の官吏及び捕獲者には褒美として位や品物が与えられています。自らにゆかりの深い地からの吉兆に、天皇はおおいによろこんだのかもしれません。

4. 讚良と中央の関係

讚良地域と、飛鳥時代当時の都との関係を示す資料は、それほど多く残っているわけではありません。しかし、特異な資料として、小型海獣葡萄鏡の出土があげられます（後川他編2015）。

四條畷市の讚良郡条里遺跡でみつかったこの鏡は、鏡面等が磨かれていない、まつり専用の鏡です。同じような小型海獣葡萄鏡は、これまでに全国で12点みつかっています。そのうち8点は飛鳥・奈良時代当時都があった奈良県で出土し、大阪府下では唯一です。このようにみると、奈良県内、それも飛鳥～奈良時代に都があった藤原京や平城京での出土が多いことが注目されます。この点から、この鏡は都付近で製作されたものとみられます。類例の中には海上交通の要衝での国家的祭祀遺跡から出土しているものもあり、この点も中央からの流通であることを裏付けると言えます。

このように都で行なわれたまつりと同様のものを使ってまつりを行なっている点は、讚良地域が中央と密接な関係を持っていたことを示していると言えるでしょう。

また、厳密には讚良の隣、交野郡域になりますが、寝屋川市石宝殿古墳の存在も考えておく必要があります。飛鳥時代は、まだ古墳がつくられていた時代で、天武・持統天皇をはじめ当時の天皇が葬られた墓も墳丘を持つ古墳でした。石宝殿古墳は7世紀中頃の築造とみられ、主体部は巨石を用いた横口式石槨で、古墳の背後には3個の巨石が一列に並んでいます。昭和63（1988）年の調査で、列石の西側に続く石がみつかりました（濱田編1990）。その設置角が135度だったことから、古墳の平面形が八角形だった可能性が指摘されています。また列石の内側には石が敷き詰められていたことがわかりました。副葬品は不明ですが、江戸時代に古墳の側から金銅製の蔵骨器が掘り出された記録があり、関連性が指摘されています。八角形の墳形は、天武・持統天皇陵のように皇族の墓に多く採用されるため、この古墳の被葬者は天皇家にかなり近い関係があったのかもしれません。

5. おわりに

ここまで、持統天皇と讚良地域の関係を中心みてきました。持統天皇のお名前である、「鷦鷯讚良皇女」は、現在の四條畷市域を中心とした讚良地域にその名の由来があり、この地にいた渡来系馬飼い豪族の佐良々氏や宇努氏とのかかわりが考えられることを述べました。讚良地域では中央におけるまつり（祭祀）で用いられた器物（小型海獣葡萄鏡）がみつかっており、中央との密接な関係がうかがえること、交野郡域の讚良郡隣接地区に、天皇家とかかわりの深い八角形の墳形を採用する古墳（石宝殿古墳）があることも、この地域と中央との関係を想起させます。このように、持統天皇との地域の関係について考えることができました。

文献の存在する時代になると、文献と考古学的な調査成果の内容との関係をどう考えるかも重要です。今後も、持統天皇と四條畷との関係を裏付ける資料の探求を続けていきたいと思います。

（實盛）

主要参考文献

- 後川恵太郎・實盛良彦・井上智博編2015『讚良郡条里遺跡』四條畷市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター。
宇治谷孟1988『日本書紀 全現代語訳』下、講談社。
宇治谷孟1992『続日本紀 全現代語訳』上、講談社。
大西貴夫2004『天武・持統朝 その時代と人々』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館。
西光慎治編2013『牽牛子塚古墳発掘調査報告書』明日香村教育委員会。
四條畷市教育委員会編2006『こども歴史 わたしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。
四條畷市教育委員会編2010『歴史とみどりのまち ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。
四條畷市史編さん委員会編2016『四條畷市史』第5巻考古編、四條畷市。
杉山 洋2003『唐式鏡の研究』鶴山堂出版部。
瀬川芳則1975『清滝の古寺正法寺と氏寺の造営』四條畷市文化財シリーズ3、四條畷市教育委員会。
千田稔・関根俊一2015『古代を創った人びと 天武天皇・持統天皇』奈良県。
瀧音能之監修2016『古代史再検証 持統天皇とは何か』別冊宝島2490号、宝島社。
遠山美都男2010『天智と持統』講談社。
直木孝次郎1960『持統天皇』吉川弘文館。
塙保己一編1894『新撰姓氏録』『群書類聚』第17輯、経済雑誌社。
濱田幸司編1990『石宝殿古墳』寝屋川市教育委員会。
平尾兵吾1931『北河内史蹟史話』(1973年増補再刊)。
松井一晃編2017a『大海人皇子 天皇への道』平成29年度春季特別展、歴史に憩う橿原市博物館。
松井一晃編2017b『天武天皇 翼の世界』平成29年度夏期特別展、橿原市教育委員会。